
最後の晩餐

山村いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の晚餐

【コード】

N7963D

【作者名】

山村いつき

【あらすじ】

この国を憂いた男が最後には世界に嫌気がさし自ら命をたつまでの最後の1時間を描いた作品

時計の針は午前3時。

何度目であつただろうかこの本を読むのは。

三島由紀夫の憂国を読んで以来この国のことを考えるようになった。そして未来に何も無いこと。

政治家は国民に何もしてくれないことを理解した。都合の悪いことは知らんぷり。

そのくせ大言壮語のスタンドプレイ。

もう飽き飽きだ。

そろそろ着替えよう。

私は白いカッターシャツと黒いパンツに着替えた。

最愛の人は横で心地よい寝息を立てている。

五十嵐麻美とはこれまで長い時を過ごしてきた。

「あなたは私のこれから為すことを理解してくれるだろうか？」

「数々のわがままを聞いてくれたね。これが最後のわがままだ。」

いつのまにか独り言をつぶやいていた。

その言葉に気がついたのか麻美が目を覚ました。

「あら、これから寝るんじゃないの？なんでそんな格好してるの？」

麻美は不思議そうな顔で聞いた。

「なんだか落ち着かなくてね。それより熱いお茶でも入れてくれな
いか？」

私は苦笑いをしながら答えた。

寝起きにありがちな不機嫌さの欠片も匂わずはいはいといいながら麻美は台所に向かった。

この後ろ姿も見納めかと思うと一段と愛おしく思えてきた。

思い返せば私にはもつたないぐらいに完璧な女だった。

料理をさせても家事をさせても文句のつけようがないぐらい完璧に

こなした。

容姿も端麗であった。

そんなことをおもってるうちにお茶が入った。

「お茶を飲んで一服したら私も寝るから先に寝ててくれ。」

言い終わるが先か麻美は布団に入っていた。

それから1分とたたないうちにまた心地良さそうな寝息が聞こえてきた。

煙草を燻らせながら熱いお茶を飲む。

煙はゆらゆらと漂い、オレンジの灯りにとけ込んでいく。

至福の時である。

ふと私は女を抱いている時とこの時、どちらが幸せだろうかなどと秤にかけていた。

思わず吹き出しそうになった。

こんな時でさえこんなことを考えると。

なんとも滑稽である。

いつのまにか時計の針は4時になろうとしていた。

そろそろやらなければ朝を迎えてしまう。

私は煙草を灰皿でもみ消し、ポケットから白い粉を取り出した。

それを残ったお茶に溶かした。

これを飲めば何秒間かした後すべてが終わる。

最後にみるこの世界は綺麗なものでありたい。

そう思い私は麻美の顔をもう一度見た。

そしてその美しい顔にそつと最後の口づけをした。

最愛の人と共有するこの空間。

それだけがこの汚い世界で唯一純血を保っている。

私はお茶を一気に飲み干した。

この世界が美しくなることを願いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7963d/>

最後の晚餐

2011年1月27日13時43分発行